

日本と台湾のこども園（幼稚園）における暑さ対策

— 暑さはどう付き合い、子どもを育てるか —

子どもの健康福祉研究所 所長・医学博士

前橋 明

（早稲田大学名誉教授）

要 旨

台湾の幼稚園の暑さ対策は、すべての園が特別な設備や完璧な環境をもっているわけではありません。日々の小さな工夫と、その日の状況に合わせて変える柔軟さ、そして、子どもといっしょに「感じ、調整する」姿勢があります。

台湾では、「暑さは避けられない日常」、日本では、「近年、急速に深刻化している課題」として捉えられますし、台湾の幼稚園の暑さ対策は、特別な設備ではなく、日常の工夫と柔軟な判断の積み重ねによって支えられていることをお伝えします。

よって、日本でも、今後は、戸外あそびを「暑いからやめる」だけでなく、「暑さはどう付き合うか」を、子どもといっしょに学ぶ視点が、ますます大切になっていくでしょう。

key words : 日本、台湾、こども園（幼稚園）、暑さ対策、

はじめに

本報では、台湾の幼稚園（幼稚園）の暑さ対策を切り口に、これからの日本の保育・教育で、暑さとう向き合っていくかを、皆さんといっしょに考えてみたいと思います。日本も、ここ数年、「今日は暑すぎて外に出られない」「プールも中止」という日が、当たり前になってきました。一方、台湾はどうでしょうか。台湾は、暑いことが特別ではなく、日常です。今日は、その台湾の幼稚園が、暑さとどのように付き合っているのかを、日本との違いを交えながら整理し、検討を加えてみます。

気候の違い

台湾は、4月頃から10月頃まで、とにかく暑い時期が長く続きます。しかも、湿度が高く、日差しが強いです。突然の豪雨や台風も、珍しくありません。つまり、台湾では、「暑いから特別に対策する」のではなく、暑いことを前提に保育や教育が組み立てられているという特徴があります。

日本はどうでしょうか。四季があり、本来は、「夏は暑いけれど、期間は限られている」という感覚でしょう。しかし、近年、その前提が崩れつつあります。

まず、ここでは、**気候状況の違い**を比べてみます（表1）。

表1 台湾と日本の気候状況の違い

項目	気 候	暑い期間	特 徴
台湾	高温多湿・強い日差し	約4～10月	突然の豪雨・台風
日本	高温多湿・年々猛暑化	主に6～9月	猛暑日・熱帯夜

環境づくりの違い

園庭や屋外環境の工夫を調べてみます（表2）。台湾の幼稚園では、とても高価な設備があるわけではありません。移動式テント、竹すだれ、使わなくなった傘を再利用した日よけ等、低コストで動かせる工夫が多く見られます。ポイントは、「暑さをなくす」ことではなく、暑くなったら、「すぐに涼める場所があるようにする」という考え方でしょう。

一方、日本の特徴は、固定式シェードや遮熱舗装など、設備中心の対策、安全基準（暑さ指数）・管理マニュアルを重視、暑さが厳しい日は屋外活動を中止する判断が早いと感じます。要は、「暑い日は使わない」「中止」の判断が比較的早いです。ただ、日本でも、これからは、「完璧な環境を整える」だけでなく、臨機応変に調整できる余白が、より大切になると感じています。

共通点は、日よけはシェードや樹木による日陰づくり、地面の照り返しを抑える工夫、風通しを意識した空間設計でしょう。

表2 環境づくりの台湾と日本の比較（園庭・屋外空間）

共通する工夫	
•日よけシェードや樹木による日陰づくり	
•地面の照り返しを減らす工夫	
•風通しを意識した設計	
台湾の特徴	
•移動式テント、竹すだれ、再利用素材など、低コスト・可動式の工夫（写真1～13）	
•ミスト、植物、水など、自然の力を活かした冷却。・ミスト設備は、湿度が高い日は、使用を控え、送風中心に切り替え、長時間の連続使用は避け、短時間・休憩時に限定するとよい。	
•暑さを完全に排除するのではなく、「涼める逃げ場」を複数つくる 暑さと共存し、逃げ場をつくる	
日本の特徴	
•固定式シェードや遮熱舗装など、設備としての対策	
•安全基準・管理マニュアルを重視	
•暑さが厳しい日は、屋外活動を中止する判断が早い	

台湾の日よけシェード



写真1 三角形のタープ（日よけ布） 好来幼稚園



写真2 園庭のタープ（好来幼稚園）



写真3 風通しを確保した壁（2面）のないプレイルーム（方圓幼稚園）



写真4 折り畳み式タープの収納（方圓幼稚園）



写真5 グラウンドに設営された折り畳み式タープ（方圓幼稚園）



写真6 グラウンド上に開かれたタープ（方圓幼稚園）



写真7 グラウンド上に開かれたタープの下で遊ぶ幼児（方圓幼稚園）



写真8 固定遊具も覆うタープ（方圓幼稚園）



写真9 天井のある施設を使っでの運動会（方圓幼稚園）



写真 10 建物の中の遊技場（東湖国民小学校）



写真 11 2階から降りてくるすべり台（東湖国民小学校）



写真 12 窓のない建物の遊技場の中で遊ぶ子どもたち（東湖国民小学校）



写真 13 天井は太陽発電パネル（東湖国民小学校）

活動時間・カリキュラム

台湾では、屋外活動の時間帯がとても明確です。基本は、午前 9 時より前、または午後 4 時以降。そして、活動時間は、10 分、15 分と、細かく区切られて展開されていることが多いです。「今日は、少し暑そうだな」と感じたら、予定を変更することも珍しくありません。要は、活動は、1 回 10～20 分程度に区切り、休憩と水分補給をこまめに実施しています。気温だけでなく、暑さ指数（WBGT など）を参考に柔軟に判断しています。

一方、日本では時間調整は行いますが、行事・計画が優先されやすいことと、活動可否は日単位で判断することが多いです（表 3）。そのため、午後から曇りになっても、朝の決定で一日が動いていることがよく見られます。

表 3 台湾と日本の園の活動時間・カリキュラムの工夫

台 湾
・屋外活動は、午前 9 時以前／午後 4 時以降の園が多い。
・1 回 10～20 分程度に区切り、休憩と水分補給をこまめに行う。
・気温だけでなく、湿度や日射を含めた暑さ指数（WBGT など）を参考に、その日の状況で柔軟に変更
日 本
・時間調整は行うが、行事や計画が優先されやすい
・「今日は屋外」「今日は室内」など、日単位の判断が多い

暑さ対策を支える生活・健康・考え方の違い

水分補給・食事の工夫において、共通点は、こまめな水分補給、喉が渇く前に飲む習慣づけです。

台湾の特徴としては、白湯や常温の水が中心であり、電解質飲料は薄めて、必要時のみにし、スイカ、パイナップル、トマト等、からだを冷やす果物が日常的に活用されています。

日本の特徴は、冷たい水・麦茶が中心で、スポーツドリンクの使用が比較的多いです。食事と暑さ対策の結びつきは、今後の課題でしょう。

水分・食事の工夫

台湾では、冷たい飲み物はあまり出ません。白湯や常温の水が中心です。電解質飲料も使いますが、薄めて、必要なときだけ。また、スイカやパイナップル等、からだを内側から冷やす果物が、おやつとして自然に取り入れられています（表 4）。

暑さ対策が、特別な「対策」ではなく、日々の生活の延長にあることがわかります。

表4 水分補給・食事の工夫

共通点
•こまめな水分補給
•喉が渇く前に飲む習慣づけ
台湾の特徴
•白湯や常温の水が中心
•電解質飲料は薄めて、必要なときだけ
•スイカ、パイナップル、トマト等、からだを冷やす果物を日常的に活用
日本の特徴
•冷たい水や麦茶が中心
•スポーツドリンクの使用が比較的多い
•食事と暑さ対策の結びつきは、これからの課題

服装・健康管理

台湾では、服装は明るい色で通気性・吸汗性の良い服装、帽子・薄手の長袖も一般的で、紫外線対策も暑さ対策と同時に行っています（表5）。蚊・感染症対策も重視され、体調変化があれば、すぐ休憩・クールダウンすることがよくあります。「暑いから薄着」だけではなく、「どう守るか」という視点が常に含まれています。

一方、日本では、園指定の体操服・帽子が中心で、紫外線対策は業者依存の傾向が強く、また、健康管理はマニュアルに基づく対応が多いです。

なお、地面の温度対策においては、黒色のような熱を吸収しやすい舗装を避け、明るい色や遮熱素材を使用の方が良いでしょう。芝生、人工芝、透水性舗装を採用し、照り返しを軽減してください。さらに、活動前に散水を行い、地面の温度を下げることも有効です。ただし、活動中の直接散水は避けましょう。

表5 服装・健康管理

台 湾
•明るい色で、通気性・吸汗性の良い服装
•帽子や薄手の長袖で、日差しと紫外線を防ぐ
•暑さ対策と同時に、蚊・感染症対策も行う
•体調変化を見逃さず、すぐに休憩・クールダウン
日 本
•園指定の体操服・帽子が中心
•紫外線対策は進んでいる
•健康管理は、マニュアルに基づいた対応が多い

暑さへの考え方

台湾では、暑さは避けきれないもの、だからこそ、安全に付き合う力を育てる、涼む・休む・調整することを子ども自身が学んでいます（表6）。一方、日本では、暑さは危険なもの、まず守る・制限する、大人が判断し、子どもは従う形が多いです。

要は、台湾では、暑さはなくせないものです。だからこそ、暑くなったら休む、涼しい場所に移動する、水分をとることを、子ども自身が経験を通して学んでいます。一方、日本では、大人が判断し、子どもを守る場面が多くあります。どちらも大切だと思います。ただ、これからの日本では、守るだけでなく、暑さと付き合う力を育てる視点も必要になってくると思います。

表6 暑さに対する「考え方」の違い

台湾の考え方
・暑さは避けきれないもの
・だからこそ、安全に付き合う力を育てる
・涼む・休む・調整することを、子ども自身が学ぶ
日本の考え方
・暑さは危険なもの
・まず守る・制限する
・大人が判断し、子どもは従う形が多い

ま と め

台湾の幼稚園の暑さ対策は、特別な設備よりも、日常の工夫と柔軟な判断の積み重ねによって支えられています。日本においても、今後は、戸外活動を「暑いからやめる」だけでなく、暑さとうどう付き合い、どう乗り越えるかを、子どもといっしょに学ぶ視点がますます大切になっていくでしょう。

本報告が、日本の保育現場で、「できることから、一つ、試してみよう」と考え、工夫するきっかけになれば嬉しく思います。また、活動前の散水は、有効ではありますが、散水後は滑りやすくならないよう、排水を確認すること、そして、水たまりを残さず、蚊の発生防止に配慮することも求められます。

文 献

- 1) 前橋 明編：外で遊ぶ子は、よく育つ―幼児期に必要な「時間」「空間」「仲間」の魔法―，大学教育出版，2026.
- 2) Akira Maehashi:Creating a Healthy Children – Heatstroke Prevention Measures and Outdoor Play During Summer–, The 6th Conference of The International Society of Physical Education of Young Children, 2025.